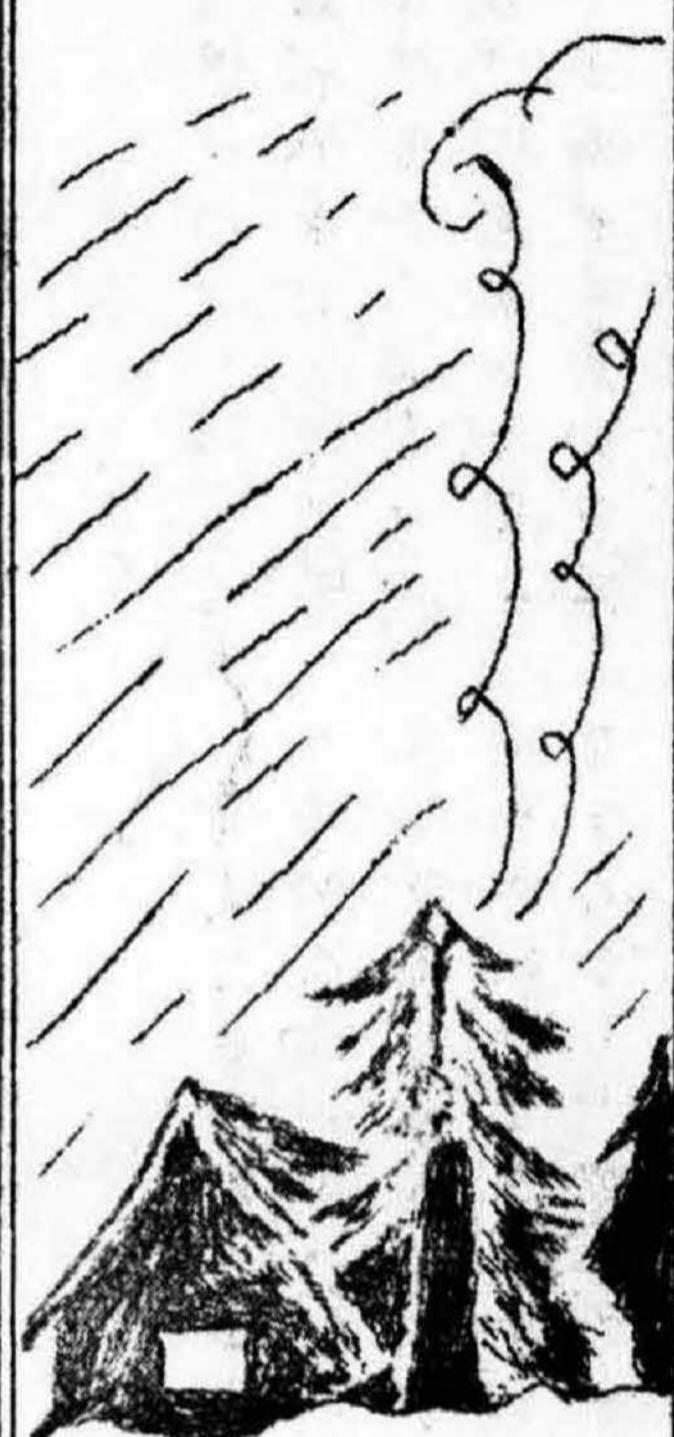


會報



第三年第ニ号

昭和七年四月二十五日發行

通卷十七号

では何よりの樂しみでもあつた。大事な私の
山友達の一人だつたのだ。
仕事を捨て、も、せめて葬式にでも加はり
度」と電報で向合はせたのだが、返事の未だ
頃はもう時間が間にあはなくなつてゐた。彼
立山の山脈が真白に光る春の有明村が月夜浮
んで来る。淋しい行列が村を通つてゆくのが
目と映る。

(浦松)

中山彦一のこと

私は最後のもいやを待つてゐた。三十日の午後、新聞社からの電話で中山が雪崩に埋つたことを知つた時から、私は此のひしやに望みをかけてゐた。中山が、雪崩で然も常念の一ノ澤あたりで、死ぬなんて事が、どうしても考へられなかつた。併しその望みも、三十一日には駄目になつてしまつた。死体が掘り出された。そういふ知らせが手に入つた時、私は書きかけてゐた原稿を放り出して泣いてしまつた。

何年かをかけて、一諸山登らうと約束してゐた山が幾つかある。それも果敢なくなつてしまつた。それよりも、私とつて北の山が急に遠いものゝ様なへなつてしまつた。山での私のほんとうの気持を、中山程よく知つてゐて呉れた者もない。一諸山の事を話しながら歩く。それが私とつて
大島亮吉さんの「山」の序文に横さんが「眞面目
に登山者は苟且にも山で命を失くしてもよいふど
と口には為あいであらうが、同じやうな運命を余
け坦つてゐることは然つて居て知つて居ると云ふ
て居られる言葉が今度ばかりは、しみじみと身に
しみた。彦さんも安心して死んだ事だらう。山の懐に抱
かれて、さう思ふ事がせめてのあぐさめだ。
もう一度高山から今度は加賀の白山へ出やうと
約束した事も、奥又四郎谷のあの鷹の池の岩小屋
でのんびりと煙草を飲まふと思つた望みも全てメ
チやくだ。彼と一緒になければ恐らくすこしも
面白くあるまい。思へば本群二年の夏、浦松さん

等と明神の尾根をやつたのが彼と一諸大なつた最初だつた。一枚岩の下で日が暮れて長い岳川の下りを彼の安晏節を廻きながら下つて行つた。それから何度一諸に行つたかしら。中島と渋松氏と彼と四人で、劍から針木峠を越へたのはたしか二年から三年になる四月だつたか、天気大めぐまれて予定通り気持の良い劍を持つた後、スキーをしよつてぶらぶら籠川の谷を下つて来た時シラネジの花が満開で谷中が天国の様に香つて居たつけ。二人で出掛けた秋の鹿島嶺、黄に紅に燃へた鹿島の谷、才木バコの道をたゞがれのしみる空氣を分けて急いだ事もあつた。あの時食つた小熊原のリンゴの冷く青もあつた事。忘れもしない去年の元旦鹿島嶺へ行く尾根の上で雪庇のくずれに乗つて谷間に流された時、雪崩が止んで助つたと知つても彦さんの姿が見へる迄はどうしてもひゞいふるゝが止まらなかつた。あの時は彦さんも薩分苦勞した。その春野彦峠を越えて高山へ二人で行つたのは最も樂しかつた旅の一つだつた。今度行つても高山の白河屋の娘さんも彼と一緒にでなければその顔も憂る事だらう。美女峠へ行つてもあの雄大な壁から御岳へかけてのパノラマを恐らく涙が先に立つ事だらう。去年の十月彼の家へ行つて燕へ一諸に登つて来た

のが最後になつて仕舞つた。たつた一人残された
おかみさんはさぞ困つて居るだらう。おかみさんは
は北の方の山へ行く時はなんだか気持が悪いと何
時でも云ふて居たが、かへつて彼が自分の家の様
にして居た、そして又初めて冬山をやつたと云ふ
常念で七つた事も何かの因縁か。そう云へば高山
の帰り萩原の近くの神社で休んだ時今を感りと呴
きほこつた櫻が小枝一つ動かさず花片一ひら落さ
ず物凄い迄に青く静まりかへつて居た事等はつき
りと思出される。

高橋益二君とも一度は槍平から槍へ、一度は参さんや近ちやんと鹿島鑑へ行つた。思はず目頭があつてある様な純情の持主でスキ一はうまくなかつたが實によくがんばつた。そして常にぐくしながら人の一番いやがる仕事をだまつて一人でやつて居た。常に最も尊敬して居た山友達だつた。あまり人がよすぎた為めにいつでも預して居た様でその家等も子供が多くまことに氣毒だつた。

塙田とは前にも書いた槍平の時に一諸だつたさりであまりよく知らない。スキーをはかないので槍を越へた時等隨分後れて心配した事等おぼえて居る。

彦さんは常に益さんの面倒を見て居た様子だった。一諸に仲よく常念に眠つて居ることがせめてもなぐさめたならう。自分の山の生活を極りなく美しいものしてくれた七き二人に對して心からの感謝をさへげる。

ひそかなる心をもりて
をはりけむ。命のさはく
言ふ事もなく。 欽照空。

(云)

拝啓、久しく御無沙汰致して申訳ありません。御許下さい、先日は御便り有難う御座りました。北海道へ行かれました。

最早御帰宅された事と思つて居ります、北海

道の山はなか／＼スキーはい、ですね、
實真の山は十勝です。高橋君のは立派な小舎が
二つありましたが何處でしょか大分寒いようですね。
ね一月学校の方と飛驒側へ下りましたが貴兄と行
つた時千町ヶ原迄で行きましたがあれは極く口も
とであれより上は大に雄大なものでなか／＼よい
スロープです。飛驒側にはよい処が沢山ありますね。
北海道へらぶれば私のあか程大も行かぬ事でしょ。

彦さんの手紙

今年は性秉田附近に小舎が出来るそうですが出来れば大変都合がいいですね。
九藏の方や甲で写真を送つて頂いて大変喜んで居りました。私より改めて御禮申上ます。
今度白山へ行くのを日支問題の為め次ぎに拠乗しましたが実に残念でした。
御暇を見て白川の大家族別を見て大白川温泉より白山へ御登りになりませんか飛驒側からなんだか面白そうです。
先日堀岡さんから御手紙頂きましたがなんだか病気して居る様ですね。
時節柄御自愛あられん事再会の日を御待ち申して居る次第です。
雑書ながら御禮旁々御返事迄で

三月十九日 磐野計藏

ふりやゆ彦一

雪の峠路

三国峠 三國峠
參觀交代の大名が通つたといふ三国峠、越後の毒消発が越えてくるといふ三国峠、此峠路を越えてみたといふあこがれは、峠の麓の山の出湯法師と結びついて、久しい以前から私の胸裡に刻み

つりられて居る宿題だった。其機会は遂に到来した。春まだ浅い三月二十日、山友三人と共に雪の三国峠を越えて越後路に入り、野を歩り、立夜越えて湯沢までの山旅は今は快い追憶となつて懸る。

× × × ×

第一日、三月二十日。

早春の朝まだ、一行を乗せたオードは、そば降る雨を漸いて三国街道を西走していった。気味悪いほどの大粒がさと、此雨とを考へ合せると上越国境尾根大坂へ雪があるかどうか疑問だつた。兩くうたれながらスキーを想いであえぎ登る一行の姿を想像して四人は思はず顔を見合せた。西行暫時、ほのぐとあけきめる頃、雨はいつしか雪になつて、顧る自動車の轍が街道の新雪に二條のシユーポールを次第に深めていった。笠の湯しか雪になつて、夜は全くあけはなれ、見上る空に乱雲の動きもあはたゞしい。木々は白衣を装ひ、路傍の若竹は一行の行手に卧して運転手を當感させた。永井で法師温泉に向ふ二人の同乗者と別れ、スキーキを肩に街道にかかる。可成な寒さがて、晴れを思はせる。永井の部屋のある一軒の昨夜から降りだしたといはれる雪は尚も霏々とふ

りしきつて、早三、四寸となり樂に入キが履けるのは天祐といふより外はない。七時半出發。夜汽車で充分塗りこんだゾームの青は断然利いてあがらし以上だ。手頃の緩傾斜が山腹を躊躇つて、降りにはあまり有難くないカーヴをきりながら登つてゆく。その頃から可成な風が吹きつけてきた。やがて前面に相當なキックターンの急斜面があらはれた。地図の一〇一三米独立標高辺である。此辺からワックスは利きすぎて足はさながら磐石をつけたるが如くといふ有様に、さすが強情我慢の磯野、近藤もたまりかねて到々スキーキをぬぎ、ワックス落したかゝる。私も無論其お仲間である。へばりつい大雪はまるで氷の様で、ナイフで削り落す始末である。あぶらしの村尾は涼しい顔をしでゐる。登りつめた所で第一回の朝食、雪は止まないが、磯野は相當に遠く、時々薄陽がさす。機い傾斜が長々と続く上に、新雪は漸く深くラッセルが亭々と茂り合つてきた。経の両側には樹の巨木が亭々と茂り合つてゐる。十時、漸く磐若塚、法師への降路の分岐点がある。経は愈々平坦、雪は益々深く脛を没するばかり。三国峠正午着もあやぶまれてきた。風は愈々強く、所々に雪庇と、露岩とがあらはれはじめた。やがて緩い降りが大分続いて左手の澤が深く尾根筋へきれこんでゆく。

澤と徑の交叉する所に百間櫛といふ標木が立つてある。夏ならば堂々の音をきく所であらう。法師からの登路が、はるか下の筋を登つてくる。其登路と会するあたりまで来ると峰に聳え立つ送電塔が視野に入つてきた。峰はすぐそこだ、が雪煙にまみれた塔は風に咤々し怒号して物凄く、越後側への滑降は容易でないらしい。

午後一時、峰着、すさまじい強風でとてもまともには見られない、登高の計画をたて、きた三国山は、越後側も、上州側も全然雪がなく、草付と皴が露出してゐるばかりか、蒸々たる雪煙につゝまれ、中腹以上は全く見えない。登高の危険と不愉快とを考へ合して、遂に登頂を断念した。

眺望も何も無い。耳をつんざくやうな寒風が怒

済の様に押しよせて来るばかりである。今は一刻の猶予も許さぬ。直ぐ降りいかつたが、吹き上ぐれてくる強風とともにすれば視野を奪はれる上に、一寸すら容易の業ではない。近チヤンは十八貫の巨体を利して無ニ無三に雪庇をブチ破つて降りてゆく。磯野は杖を一本折つてしまつたのと北海道で仕込んだばかりのパリ／＼のスキーに傷をつけまいとかばうので極めて慎重に下つてゆく。数十分の惡戦苦闘の後漸く息な峰路を下りきることが

出来た。越後側は思つたより遙に雪が少く、峰に沿ふ尾根も殆んど段の連続であつた。仙之倉登攀の旗団はこゝに完全にうち方砕かれてしまつた。三国山を棄て、仙之倉を断念してしまふと氣分は急にノンビリとししまつて、小沢に沿ふた三国街道の緩傾斜を御ちながら重いラツセルの足を運んだ。峰越を思ふと軽い憂鬱を感じるのだった。遠く家並が見えだした。間もなく郵便局をかねた湯殿の本陣湯本氏の宅があらはれて、一行は其門口にスキーをぬいだのである。（未完）（浩一郎）

外 面 如 菩 薩。

理論論争に於ては孫さんにははない。何しろ人事百般、人情風俗、自然科学、歴談、失せ物、名論卓識には太刀打ちが出来ない。手もなく参つて、すぐ旗をまいてしまふ。残念だが仕方がない。そこで実際論争にうつる。時は今、世を挙げてアッシヨンパンのパンと云ふ世の中だ。口がハ丁あらうと、手がハ丁だらうと、それと脚がハ丁あらうと、二枚の綱をつけて雪の上を歩かせれどこちらの天下

だ。白銀の上で一つカシく、ノウ踊りでも踊らして、やらうと陳をねらつてた。正しく是、銀色テロ。瞳はマリヤで、容は秋迦であらうと内心は夜叉の牙とサタンの爪を磨いてゐたのだつた。アタカモよし、頃はきさらぎ末の方、みすゞかアタカモよし、頃はきさらぎ末の方、みすゞかる信濃の国の弥固岳登行。同志、熊公、コンチやがん。然しその日は風が強かつた。それによがスが濃かつた。雪を吹き上げて額は痛く、視界は漠として限られてゐる。思へば何と、その寒さの為のシカツメツ面が秋迦の宽容で、凍つた睫毛を見開いてゐるのがマリヤの瞳であつたのだ。（同志よ！君達の顔の造作を最も深刻に改造した時に偉人の像があるのだ！）この大自然の威儀と聞つて道を求めて行く為には銀色テロリストも樂ぢやない。こよなき好戦大長蛇を逸しちやつた。若櫻民政総裁閑西遊説を狙つてはたさず空しく東京に帰つた血盟団員の様に次の機をうかゞつてゐた。

丁度一ヶ月を経て三月二十日、上州路三国峠を越えて越後路芝原峠へ、この度の同志は、雲助、コンちゃん。このコースは三国峠火打峠、二房、峠、芝原峠と四つ峠がある。暗殺団にとって絶好の地の利である。第一の峠で逃しても、第二、第三されど駄目なら第四、どれかでやつちまふ事を考へてた。

所がどうだ。一を聞いて十を悟る神童！も変だし、神走がや可哀そうだし、一孫さんはこの間に格段の進歩を示し、これを漏らすには未熟吾人の力量を以てしては及ぶ所ではない。とう／＼無事に湯沢に出て汽車に乗り、お酒を飲んで孫さんの奥さん作る所のチキンカツレツを御馳走になりへこの暗殺団は安く買収されます。スチーブに温まつて大人しくねちやつた。嗚呼かくてその雄団空しく碎けたのである。矢つ張り誰かこの心事をいたんで血を啜つてピストルをズツ。なすことを盟ふ者か、でなければ爆薬筒を抱いてこの難に赴く勇士の出現を持たなければ矢つ張りスキーチや孫さんは殺せないつてことになるんです。

ヘ村尾

三国峠を越えて

三月二十一日春季皇慶祭と云ふ日は實に有難い祭日である。前日が日曜日と来て居るからには有難き極みである。

此の休日ベンちゃん、雲ちゃん、孫さんと四人は（雲ちゃんは林して四怪と云えり）峠道をたどつて居る。此一行は割合に行儀が宜しい。熊さんとか「キ

ントンの様な尾新タンクは幸に参加しなかつた
為め毎尾新の襲来を免れ得たは幸である。何を申
せ給八貫六。の僕とつて登り坂で前のフタン
クレド毒尾新を発射される事は死に勝る苦痛であ
る。

あきれる程次くので峠途から三国山なんか見向
きもせず残奥に滑り込む、計畫は飽く迄雄大に実
行は臨機應変、何日もの手である二日間で三国山
から仙の倉山へ行つて芝原峠へ出ようかと考へた。
云へば八海山の時の様に決まって居る。
考へる事は自由である、然しこんな事を孫さん大
ベンちやんなんかは同類であるから僕の考へた事
は直に打明けて宜しいが孫さんは云ふ前大一寸と
科学的合理性の立場から観察を下した後でないと
駄目である。

一体僕を直接指導してくれた山岳部の先輩は皆
んな非科学的な立場のお方である。朱に交は
れぬ亦くなる。僕も何日の間にか此の風習に染ま
る事久しいのである。

給円を持って其の内で光す給日間の一切の山旅
の準備品を買って其の残りで猿橋駅迄汽車賃を払
ひ其の残りで旅館に二泊して最後大山小舎でお互
に有金全部出し合つて見てベンちやんが三円餘、
熊さんが二円餘是れで更に増富嶽泉大一泊して蓮

崎駅迄自動車に乗つて其れから東京迄切付を買う
つもりなんだから刺し。然し僕は拾円の外に五
円札を奥深く藏ひ込んであつたのを助かつた。
然し是れが何んとも云えない位嬉しい。科学的
合理化を強制されつゝある近代生活者の一員たる
僕等とつて山旅こそ、此の惡癖に浸り樂しまず唯
一つの道であらう。

題して「三国峠を越えて」なんて表看板だが何
処近脱線してもきりがない。此の辺で又峠道に戾
りたい。

峠の下り道は大変である。吹き溜りが到る処大
出来て居て恩ふ様に滑れない。一壁壁の様に薄い
高さ六尺位の吹き溜りがあつたので上から勢をつ
けて肉彈を打ちつけられれば向ふ側へ出られそだつ
たので、やつて見た処壁の真中で止まつてしまつ
た。吹雪が劇しいので仙の倉山なんか忘れてしま
つた様な顔をして沢山峠を越えて湯沢に出た。
翌日晴れて居たらどうだつたらう。いや欲は出
すまい。風が吹かうが、雪が降らうが僕とつて
は代へ難い有難い日である。

「二日休みし」スキーの山旅し「好いお連れし
何一つとして有難くなはないのはない。
何有難い／＼お有難がたい。なんて云ひ出しては
何処かの橋の上に座つて居る人の様に聞えるから

此の辺で有難い話は止めよう。

(近藤恒雄)

身辺だより

私が針葉樹の会員になつてから一年になるのに一度も誌上で地方の諸兄にお詫掛けなかつた事をお許し下さい。学校を出て半歳やつと職がありつゝ大事は御承知と思ひますが其処も二月の末に免せられて再びルンペ恩の生活に戻りました。當分家へあつて遊んで居ります。此の間、会計を近藤氏より引継いで受持つて居りましたが、四月で期間満了し新進へ譲る筈です。前例通り会計報告は監査と共に後継の方へお頬み致しますから次号の誌上をお待ち下さい。取敢へず餘白を利用して身辺御通知まで

(金田)

オーリンレミ才

吹く風の冷たさ却つて春を覚える時候になつた。黒点の多いのは太陽たゞそれだけ光らかいい部分があるからでその多い年は寒いと考へるとそれがいけない。黒点とは実は瓦斯体の渦巻であつてその多いのはその活動の感なるしるし、従つてセ

の多い年は暑いと考へるとなほいけ無い。実は実はだ太陽の活動感んぶれなその放射する熱量大にして地球の外気のために頗る上昇し地球は熱を奪はれるとか。胃の具合の悪いときは風邪をひく、風邪は寒いとひく、だから食べ過ぎると太陽に黒点が殖える。

電車道に土堀や雜木林の見える京都の街は夕暮のせいもあらうたゞすの森が赤く見えて春の近きを思はせたけれど、廊下に立てた二挺のスキーは便所の出入を邪魔するだけで、主人は芝の上を滑る夢へ見てゐる。二月半ばに初めて降つて、日曜に平日よりも早く起きるのはこのときばかり。愛宕五萬坪は一面のごま塩。危ぶむのを何でもかんでも誇ったトンちゃんに済まかく思ひながら、黒い中にも白い凧を探して五萬坪をぐるぐる廻るばかり。

月末に又降つた。飛んで帰つて六甲へ。これは又スキーを肩に雪を探す人の群だ、文字通り雪を訪ねて立た立てばあつちにポンこつちにポンポン残りの雪、その最も大きいふるに乗れば夕暗迫つて何とその悲痛である。太陽ふんがもう黒点で真黒大あつちまへ。そしたら何處の煙も野も山も眞白で、尤も眞暗にもなるからラテルネをつけると転んだのが分る不便はあるけれど光の描くボーゲンなんて、黒点と脳と胃と何とその関係の微妙が

(バッタ)